様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０１９

研究課題名（和文）東アジアにおける国号絵画と模写－１９４５年以降の日本画、韓国画、中国画を対象に

研究課題名（英文）Modern Oriental paintings after 1945 in Japan, Korea and China

研究代表者
荒井　経（ARAI, KEI）

東京藝術大学・大学院美術研究科・准教授

研究者番号：６０３６１７３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：1945年以降の日本画、韓国画、中国画は、各国において西洋画と対峙する絵画となっているが、自国に特有の絵画として隣国絵画とは異なる歩みを続けてきた。隣国絵画との差異は、当該絵画が掲げる「古典」に象徴され、「模写」を通して画家との接点を持つ。本研究では、日本、韓国、中国の実地調査を重ねてきた。（日本においては1945年以前も対象として文献等を調査した。）その結果、模写の手本となる古典の設定に差異や特色はあったものの、制度的な計画性は認められなかった。逆に、古典の設定（アップデイト）には、各国の絵画ならびに絵画史に互換性をもたせる可能性が秘められていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Modern Oriental paintings after 1945 in Japan, Korea and China are the painting confronted with western painting in each country.But those paintings have continued the steps different from a neighboring country painting as a painting peculiar to an own country.The difference between the painting and neighboring country painting is symbolized by "classic" of the painting.And "classic" has a point of tact with a painter through "copy".Field research has been piled up in Japan, Korea and China by this study.I also investigated before Japanese 1945 as a target.There were a difference and a characteristic in classical setting in each country.But there wasn't systematic planning ability there.A painting of each country and painting history have a possibility with the compatibility in classical present-day setting.

研究分野：日本画

キーワード：模写　日本画　東洋画　岩彩画　韓国画　中国画

１．研究開始当初の背景

日本画が近代的制度によって成立したことについては 1990 年代の先鋭的な研究によって広く知られるところとなっている。申請者は、一連の先行研究を踏まえつつ、日本画実技を専門とする立場から、2003 年に発表した博士学位研究(東京藝術大学)で狩野芳崖《仁王捉鬼》(明治 19 年)における技法材料を取り上げ、西洋顔料導入の具体像と意図を明らかにした。以来、その後の日本画がアイデンティティーとしてきた技法材料の近代性を商品開発史や実作品の調査から解明することに努め、岩絵具や和紙が明治 30 年代～昭和初期にかけて大幅に改造された近代材料であり、日本画という国号絵画の伝統性を保証するものではないことを明らかにした。

また、日本画の相対的な把握のために、韓国、中国、台湾への渡航を行って隣国の国号絵画に関わる現地調査ならびに多数の国際交流事業を展開してきた。その結果、韓国画や中国画のアイデンティティーが、画材ではなく古典絵画との関係のなかで構築されており、模写教育が重要な機能を果たしているのではないかという推論を立てるに到った。これまで、日本画家の描いた模写展が各地の美術館等で開催され、近代日本画草創期への視点が提示されてきたが、戦後日本画を含む東アジアの国号絵画への総括的な視点は未だ提示されていない。

２．研究の目的

日本画は、日本という国民国家のもとに成立した国号絵画であるが、一般には岩絵具や和紙といった特殊な画材によって規定できるものと考えられている。しかし、近代的な制度として成立した日本画が画材によって規定できるという考えには根本的な矛盾が内在している。本研究は、日本画に文化的な正統性をもたせてきた要件としての「古典」と「模写」注目する。日本画が何を模写してきたかを明らかにすることで、日本画が何者であらんとしたか、自らを位置付けてきた出自と系譜が導き出せるであろう。特に、筆法の伝承が失われた戦後日本画における模写の機能に注目するとともに、同様の国号絵画として１９４５年以降に確立した韓国画と中国画の模写教育を調査することで、東アジアの国号絵画という近代的制度に共通する構造を実制作の現場から解き明かすものである。

３．研究の方法

本研究は、大きく国内での日本画に関する文献調査と東アジア各地域への渡航調査によって進めた。

日本画における模写に関する調査は、明治期～1945 年までの期間と、1945 年～現在までの期間に区分し、前者においては、指定文化財制度の成立や日本美術史観の形成に関する文献資料を収集し、それらと日本画における模写との関連性を考察した。後者については、主に東京藝術大学の日本画教育において実施された敦煌壁画模写に注目し、その背景と以後の動向を調査した。

東アジア各地域への渡航調査では、韓国、中国、台湾の美術大学等を対象とし、研究代表者がこれまでに行ってきた渡航調査による成果を踏まえて訪問先を精査し、模写に主眼をおいた補完的な調査を行った。また、公開研究会や公開座談会に参加あるいは企画して、研究成果の発信に努めた。

４．研究成果

研究期間初年度である平成 24 年度には、1945 年以降に再編された国際情勢の中で成立した韓国画（東洋画）と台湾における中国画（国画）の調査に入るための基礎情報として、日本統治時代に開催されていた「朝鮮美術展覧会」(1922－1944)、「台湾美術展覧会」（1927－1943）の展覧会図録データの収集と整理を行った。これらの展覧会については、研究期間内に行われた〈官展にみる近代美術〉展（府中市美術館他）からも最新の研究情報を得られた。また、同年度に朝鮮美術展覧会で連続特選を受賞するなどの活躍をした日本人画家の安保道子に関する資料を遺族から提供され、その整理と解析を行った上で東京藝術大学美術学部紀要第 52 号に掲載した。

さらに韓国画については、ソウルへの渡航調査を行って、弘益大学、ソウル大学、誠信女子大学、高麗大学等の主要美術大学の数多くの教員らと意見交換をするとともに、ソウル大学の実習室見学、誠信女子大学においては実習室見学と特別講演会を行った。その後、弘益大学の李宣雨教授を日本に招聘しての特別講演会と公開対談を東京藝術大学において企画し、韓国画と日本画の模写観の相違の一端を明らかにした。韓国画においては、高麗仏画や朝鮮時代の宮廷絵画、文人山水図など朝鮮半島に由来する古典絵画を模写の対象とすることが多いものの、模写の対象やカリキュラムについては各大学間に差が大きいことがわかった。

また、中国で 2000 年代に勃興した「岩彩画」については、研究分担者として参画してきた科研基盤(B)(海外学術調査) 「中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ」で集中的に調査してきたが、その公開研究会での口頭発表ならびに研究成果報告書に掲載した論文において、「岩彩画」と模写との関係を中心に論じた。概要としては、「岩彩画」の教育カリキュラムに必須となっている敦煌壁画やキジル壁画の模写が新興の「岩彩画」のアイデンティティーとして機能していることと、そのカリキュラムが 1980 年代に東京藝術大学で行われていた敦煌壁画模写に起因していることの指摘である。さらに、東京藝術大学における敦煌壁画模写の意義については、同年度に開催された敦煌研究院

と東京藝術大学の交流 30 周年記念シンポジウムに向けて収集した資料を記念誌に編集するとともに口頭発表も行った。

また、同年度に招聘を受けた「巻軸絵画保存修復研討会」（中国美術館／北京）では、日本画における模写教育についての口頭発表を行って日本側からの情報を発信した。

平成 25 年度には、韓国における主要美術大学の一つである中央大学を訪問して、韓国画教育における創作と（高麗仏画を対象とする）模写の実情を調査した。

また、台湾に渡航し、台湾大学で開催された台日国際研討会「異地家郷」に参加して、日本統治下の台湾美術研究の最新情報を得た。その後、台中の東海大学、国立台湾美術館、亜細亜大学美術館を訪問し、台湾における中国画の一部となっている「膠彩画」の歴史と現状を調査した。日本統治時代の東洋画を引き継ぐ「膠彩画」は、首都台北から台中に拠点を移し、東海大学が唯一の独立専攻を設置している。訪問時には、大学の展示施設において東海大学「膠彩画」教育の 30 年記念展が開催されており、作品を通してその歩みを通覧することができた。また、国立台湾美術館では、陳進、林玉山、林之助らの膠彩画家の作品や彼らに影響を与えた台湾在住日本画家の郷原古統、木下静涯らの作品が常設展示されている状況を観覧できた。

日本画における模写についての調査研究では、大正末期から昭和戦前期に活躍した松岡映丘とその門下によって結成された新興大和絵を中心にした調査を行い、一派が古典の設定を重視していたことを資料から明らかにできた。また、明治 30 年前後に岡倉天心が企画し、横山大観、菱田春草ら東京美術学校の初期卒業生らが参加した模写事業に関する先行研究についても整理を行った。

平成 26 年度には、本研究に最も大きな示唆を与えた中国「岩彩画」の拠点である広州美術学院を再訪して、「岩彩画」教育の一端を担ってきた馬文西教授の退任記念展を通して日本留学前後の作品の変遷を通覧するとともに、これまでの研究成果の確認を行った。韓国では、文化財保護の立場から模写を行っている伝統文化大学（扶余）を訪問し、実習室見学と特別講演会を行った上で、教員や学生との意見交換を行った。

また、平成 26 年度には、平成 27 年に刊行する予定の著書の一部に本研究の成果を総括すべく、原稿としての取りまとめにあたった。

本研究では、各国の西洋画と対峙的に位置付けられている日本画、韓国画、中国画のアイデンティティーの形成を模写という視点から調査し、考察してきた。その際、日本統治時代の日本画と深く関わる台湾の膠彩画と、戦後日本画と深く関わる中国の岩彩画についても重視してきた。特に、1945 年以降の隣国絵画の詳細は、現地調査によってしか把握できないため、本研究で実施した渡航調査はすべて貴重な情報を得る機会となった。それらの情報を踏まえた考察は上述の著書において記述していく予定であるが、以後の研究に資するためには個別の情報を詳細に公開していく必要があり、より客観的な情報の整理が課題となっている。

日本画については、明治期から現代にいたる模写の変遷を研究する中から、岡倉天心、松岡映丘、平山郁夫をキーパーソンとして絞り込むことができた。日本画のアイデンティティーが古典ならびに模写にあるという視点に立つと、上記 3 名の構想した日本画はアイデンティティーのあり方を異にしていることが見えてくる。つまり、日本画の定義が設定される古典によって変化してきたということであり、その古典の設定には時代背景が大きく関わってきたということである。

一方、渡航調査を通して韓国、中国、台湾いずれの国や地域においても、古典の設定に差異と特色が認められたものの、自覚的な教育課程を見出すことはできなかった。しかし、いずれの絵画にとっても、何を古典とするかという問題はアイデンティティーを支える構造的な根本問題である。その設定に自覚的になることは、いたずらな自国絵画の差別化をもたらす危険性がある反面で、1945 年以降に成立した国民国家の枠組みを反映した国号絵画を越えた互換性をつくり出すことができる可能性を持っている。こんにちの国際社会のなかで求められる協調と共存のために国号絵画の再編は取り組むべき必須の課題であり、本研究の成果を踏まえた国際的な研究の進展が期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

(1) 荒井経・染谷香理・平諭一郎・中村裕美子・杉本史子「国絵図復元―巨大絵図制作の技術―」　査読無　東京藝術大学美術学部紀要第 50 号　2012 年 pp.5-pp.15

(2) 荒井経「中国における「岩彩画」の登場とその評価」科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ」研究成果報告書　東京藝術大学　2013 年 pp.127-133

(3) 荒井経・染谷香理「〈資料〉近代日本画の材料（支持体篇）」査読有　東京藝術大学美術学部紀要第 51 号　2013 年 pp.47-74

(4) 荒井経・日比野民蓉「【資料】朝鮮美術展覧会における日本人画家・安保道子について」査読有　東京藝術大学美術学部紀要第 52 号　2014 年　pp.47-64

〔学会発表〕（計　11 件）

(1) 荒井経「東京藝術大学の保存修復研究と

教学実践」巻軸絵画保存修復研討会(招待講演)2012 年 4 月 12 日　中国美術館(北京)
(2) 荒井経「日本における現代東洋画の展開と眺望」誠信女子大学特別講演(招待講演)2012 年 5 月 17 日　誠信女子大学(ソウル)
(3) 荒井経・小川絢子・平諭一郎「近代日本画の新材料　京都国立近代美術館蔵《山路》の分析調査報告」文化財保存修復学会ポスター発表　2012 年 6 月 30 日　日本大学
(4) 荒井経「東洋画の保存修復と東京藝術大学における教育」ソウル大学特別講演会(招待講演)2012 年 10 月 18 日　ソウル大学
(5) 李宣雨・荒井経　対談「日本画・韓国画の将来展望」東京藝術大学特別講演会 2013 年 1 月 28 日　東京藝術大学
(6) 荒井経「日中美術交流の過去と将来」シンポジウム「敦煌研究院と東京藝術大学交流のこれから」2013 年 2 月 20 日　東京藝術大学
(7) 荒井経「中国における「岩彩画」の評価」科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「中国における「岩彩画」の登場と戦後日本画のメチエ」第五回公開研究会 2013 年 2 月 23 日　東京藝術大学
(8) 荒井経・小川絢子・平諭一郎・京都絵美「東京国立近代美術館蔵　菱田春草《賢首菩薩》の顔料分析調査報告」文化財保存修復学会ポスター発表　2013 年 7 月 13 日　東北大学百周年記念会館
(9) 荒井経「未来に受け継ぐ絵画とその行方」さくら市ミュージアム特別講演会(招待講演)2013 年 5 月 18 日　さくら市ミュージアム
(10) 荒井経「模写の現状と課題」東京大学史料編纂所技術職員研修(招待講演)2014 年 1 月 27 日　東京大学福武ホール
(11) 荒井経「東京藝術大学文化財保存学の教育と研究」伝統文化大学特別講演会(招待講演)2014 年 5 月 23 日　韓国・伝統文化大学(扶余)

〔図書〕（計　2 件）
(1)東京文化財研究所編『横山大観《山路》』東京文化財研究所　2013 年　総ページ数 99 ページ
(2)宮廻正明・荒井経・鴈野佳世子『日本画名作から読み解く技法の謎』世界文化社 2014 年　総ページ数 222 ページ

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　　無

６．研究組織
(1)研究代表者　荒井経（ARAI Kei）
東京藝術大学・美術研究科・准教授
研究者番号：60361739